



インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

八 ごちゃ混ぜな世界（最終回）

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

八 ごちゃ混ぜな世界

☆

「次はゴーヤーを切ってみよう」

隣にいるシマさんの指示を聞きながら私は手を動かした。

「分かった」

今、台所に立って作っているのは夕飯に食べる予定のゴーヤーチャンプルーだ。

「このくらい？」

慎重に切ったゴーヤーをシマさんに見せて訊ねた。

「そうだね、大体そのくらい」

頷いてシマさんは言った。

アオイさんがいなくなってから一週間が経とうとしていた。

「そして次は……」

今はいつもの調子に戻ったシマさんだけど、アオイさんが消えた事を伝えた時には、一日中泣いて大変だった。

「アオイさんね、最後にシマさんに、『ありがとうございました』って言っていたよ」

そう伝えると。

「うう……アオイさん……そんな、アタシ何もできなかったし……うううあああああ！」

私に抱き着いてシマさんは大声で泣いていた。

私の分もシマさんは泣いてくれた。

夏美さんとは、あれから何度か連絡を取っている。

話す内容は主に、私がアイツに「何か」をした時の事だ。

「飛んだり……よく分からない攻撃をしたり……今思うと夢を見ていたような感覚です」

そう私が言うと

「俺も見ていたが、あの時の君はまるで別人のようだった。そう、まるで……いや、憶測で話すのは今は止めておこう」

夏美さんは続けて言った。

「君に起こった事について少しだけ、心当たりがあるんだ。それを今、調べている。何か分かったら伝えるよ」

「ありがとうございます、夏美さん」

一体、私はどうなってしまったのだろう。

蠅が話す夢や、時々聞こえた謎の声が、それに関係しているようにも思えるけど……ハッキリとはしていない。

最近、体験した不思議な出来事について考えていると、いつも最後に思い返す事がある。

それは、アオイさんが最後に見せた悲しそうな笑顔。

アオイさんは、アキホさんに会えて幸せだったのだろうか。

それとも、二度も親友がいなくなる経験をして、とても悲しかったのだろうか。

最初に会った時にアオイさんが言った、「あの世に行きたい」という願いに込められた意味は……。多分、全ての感情をごちゃ混ぜにしたような、そんな気持ちだったのかもしれない。

もっと物事がうまく行けば、アオイさんとアキホさんは笑い合って過ごす事が……。

「わ、手え切るよ！ 料理に集中して、たまちゃん！」

「……え？ ってうわ！ あ、あぶなあ……もう少しで切ってたわ……」

少し考え事をしていたせいで、ゴーヤーと一緒に指を切るところだった……。

りよ、料理って集中しないと結構危険だな……。

「何か考え事？」

私の顔を見てシマさんは言った。

「……いや、何でもないよ！ さて、ゴーヤー切りまくるぞー！ うひょー！」

「き、急にテンションが高くなった……」

母さんが帰ってきてからも料理は続けている。

と言っても、フーチャンブルーとゴーヤーチャンブルーだけしか作れないけど……。

「何か、料理のレパートリー増やしたいなあ」

ゴーヤーを切り終わって私は呟いた。

「じゃあ次はヒラヤーチーを作ってみる？」

シマさんはニヤリと笑ってそう言った。

「え？ シマさんヒラヤーチー作れるの？」

「いや？ 作った事はない」

首を横に振ってシマさんは言った。

「えー、今とても自信満々だったじゃん！ 何なら、作るの大得意！ って感じのドヤ顔だったじゃん！」

私は口を尖らせて抗議した。

「本か何かで調べれば作れるでしょ。料理は勢いと、『何となく』で作れるよ！」

「シマさんの根拠のない自信、少し分けて欲しいわあ……」

「分けてあげようか？」

「分ける事ができるの？」

「こう……私の霊体？ っていうの？ これを少し

分けてたまちゃんが吸収すれば」

「凄い！ シマさんにそんな力が！」

「まあ、やった事はないけど」

「何よ！ もぉー！」

「あはは！ ほら手を動かす。次は豆腐ね」

「……はぁーい」

そう、馬鹿なやり取りをしながら料理をしていると

「ん？ 電話？」

机の上に置いていた携帯が、音を立てて振動した。

「はいはい」

包丁を置いて携帯を取り、画面を確認した。

「夏美さんだ」

ピッと通話ボタンを押した。

「もしもし？ 夏美だが……。湖君、今大丈夫かな？」

「はい、大丈夫ですけど……」

気のせいか、夏美さんの声は少し疲れているようだった。

「あー……何というか少し、頼みたい事があってね」

言葉を選ぶようにして夏美さんは言った。

「頼みたい事……ですか？」

「ああ。正確に言うと、俺とか理華の頼み事何だが……っておい！ 何をす……！」

「な、夏美さん？」

電話越しの夏美さんの身に何か起こったようだと……。

すると

「あ、たまちゃん？ 私だよー理華だよー！」

「り、理華さん？」

電話の相手が理華さん変わった。

「理華じゃなくて、『ヨーカ』って呼んでよー。私とたまちゃんの仲じゃない」

「は、はあ……」

私、まだ理華さんに会ったのって一回だけなんだから……。

まるで飲んでいるかのようなテンションだけど、多分、理華さんはシラフでこれなのかなあ

……。

「理華……じゃなくてヨーカさん。あの、夏美さんは？」

そう私が訊ねると。

「あー、みっちゃん？ みっちゃんなら今、私に倒されて床に横になっっているよ。いやーこういう時に格闘技習つといい良かったと思うわあ」

「あー……そうですか……」

こういう時ってどういう時なんだろう……。

「そ、それで私に頼み事って一体……？」

これ以上ツッコむと、理華さんはずっと喋っているなので、話を前に進めようと私は訊ねた。

「そうそう、たまちゃんに頼み事があってね」

本題を思い出した様子の理華さんは、続けて言った。

「たまちゃんって男装って得意かな……ってうわ！ 暴れないでよ、みっちゃん！ きゃあ！ か、か弱い私に何てことを……って、な、なにお祓いの道具を静かに出しているの？ 私は人間だって！ それ人に使ったらダメな術だよ？ わー！ 何か召喚したし！ 怖い、怖いってソイツの顔！ 絶対に強いヤツだよ？ ソイツ……ぎゃあ……！ ……ツー、ツー、ツー」

理華さんの謎の絶叫を最後に電話は突然切れた。

「何があったの、たまちゃん？」

シマさんが訊ねてきた。

「……」

「たまちゃん？」

「……」

「お、おーい。湖さん？」

「さて！ 次は豆腐を切るんだよね！」

「えー！ 何その切り替え！ 一体誰からの電話だったの？」

「え？ 電話って？」

「今、電話に出てたじゃん！ 誰かと話していたじゃん！」

「何を言っているの、シマさん？ 私はずっとゴー

ヤーチャンブルーを作っていたでしょう？」

「なに、記憶を書き換えているの！　そこまでして今の電話を忘れたいの？」

「り、理華さんって綺麗な髪してたよねー。どこの美容室に行っているのかな？」

「り、理華さんなのか？　今の電話は理華さんからなのか？　そうなんでしょ！」

「みっちゃんさんって頼りになるよねえ」

「みっちゃんさん……って、夏美さんのこと？　夏

美さんのことを、みっちゃんって呼ぶのは理華さんだけじゃん！　理華さんだな？　理華さんからの電話だったな？」

「か弱い……お祓い……ダメな術……怖い……絶対に強いヤツ……ツー、ツー、ツー」

「何その呪文みたいな呟き！　こわっ！　もういいよ、知りたくない！　電話の内容知りたくない！　私が悪かった！」

「シマさん何さつきから騒いでいるの？　豆腐を切った後は何をするんだっけ？」

「こわっ！　急に素に戻らないですよ！　心が不安定になるからあ！　いつの間にか豆腐を切り終わっているしい！」

「はいはい」

シマさんと馬鹿なやり取りをしながら、私は携帯をちらりと見た。

理華さんの頼み事とは何だったのだろうか？

多分、また後で夏美さんから連絡が来ると思うけど……。

「……」

上手く言葉にできないけれど、シマさんがアオイさんを家に連れてきた日から私の日常が少しずつ変化してきたように思う。

昔から霊を見てきたりはしたけど、それとは違う、もつと何か深い領域に私は足を踏み入れて……。

「まーた考え事？」

呆れたようにシマさんは言った。

「う、ううん。何でもないよ」

「そう？　んじゃ次は……」

シマさんが次の指示を出そうとしたその時。

「ただいまー」

「あ、母さんだ」

どうやら、母さんが仕事から帰ってきたようだ。

「あれ？　何を作っているの？」

「ゴーヤーチャンプルー」

「そう。シマさんいつもありがとうね。たまに料理を教えてください」

「い、いえ」

以前は気まづかったのか、母さんを避けるようになっていたシマさんだったけど、アオイさんの事があってからは普通に会話をするようになった。

「次はヒラヤーチーを作る予定」

「それはいいねえ。たまが料理をするようになってから、母さんは楽ができていいわあ」

机に凭もたれながら母さんは言った。

「お仕事、お疲れ様です」

コップにお茶を入れて母さんに渡しながらシマさんは言った。

「ありがとーシマさん！」

お茶を飲み始めた母さんだったけど、「あ！」と何かを思い出したようでコップを机の上に置いた。

「仕事と言えば一昨日、職場にインパクトのある人が来てねえ」

「インパクトのある人？」

私は母さんに訊ねた。

「うん。何か最近、職場で変な事がよく起こって

ね。ガラスが急に割れたりとか、物が勝手に動いたりとか。それで、職場内で霊の仕業じゃないかって」

「霊の仕業だったら、母さん何か視えたんじゃないの？」

「それが全然、霊の姿も気配も感じなくて。あ、一応職場では霊が視える事は内緒にしているんだけど」

「あ、そうなんだ」

まあ、霊が視えると周りに言っても、あまりいいことはないと思うしなあ……。

「それでみんなして騒いでいたら、社長が霊能力者？ を探してきてね」

「霊能力者ねえ」

一瞬、私の脳裏に夏美さんの姿がよぎった。

「その霊能力者は女の人だったんだけど、何か怪しい機械を使う人だね」

「怪しい機械？」

「うん。社長が、『これは何ですか？』って訊いたらその人、『さあ、全然分からないです』って笑顔で言ったのよ」

「……ん？」

こちら辺で私は嫌な予感がした。

「社長が困った表情をしたらその人、『これをこの建物の中に置いておけば多分、異常な現象は止みます。多分!』って自信満々に言ったわ」

「……」

無言で横にいるシマさんを見ると、頭痛を起したように、頭を手をおいて下を向いていた。

「社長も私たちも、『あ、この人偽物だ』って思ってたんだけど、一応お金は払ったし試しにその機械を会社に置いたの」

「へ、へえー」

「そしたら、ほぼ毎日起こっていた変な事が嘘みたいに止んでね」

「そ、それは良かったね」

「うん。あの女の人は本物だったんだーって、職場で話題になっているのよ」

「そうなんだ……」

自信満々で怪しげな道具を使う人を最近見たような気がするけど、まさかね……。

「そ、その女の人の名前は？」

「さあ？ 社長は知っていたはずだけど、私は知らない。あ、だけどその人、帰る時に私の方に来て

ね」

「う、うん」

「『あなたには娘さんがいますか?』って訊ねてきたのよ」

「ほ、ほー……」

「ビックリしたけど、いますって答えたら、『その子は、これからいろんな人達に出会いますよ。特に、美女に出会うといい事があるかも』って言って帰っていったわ。あ、そう言えばその人も綺麗な人だったなー」

「……」

無言で横にいるシマさんを見ると、耳を塞いでいた。

「とってもインパクトのある人だったなー」

「よ、良かったね。そんな面白い人に会えて」

そう私が言うと母さんは笑った。

「あの人、多分本物だから、言っていた事は当たるかもね」

「言っていた事？」

「たまがこれからいろんな人達に出会いますってやつ。美女に会ったらいい事あるかもよ」

「わ、わーい楽しみだなあ……」

無言で横にいるシマさんを見ると、姿を消していた。

その時

「あれ？ たまの携帯、鳴っているよ」

母さんは机の上の携帯を指差してそう言った。

「そ、そうだね」

おそろおそろ画面を見てみると、知らない番号だった。

「たま？ どうしたの？」

母さんは私の顔を見て訊ねた。

「い、いや……何でもない」

出ようか出ないか、悩んだ末に私は通話ボタンを押した。

すると

「あ、たまちゃん？ 私だよー。美女の理華だよー！」

と、インパクトのある人が元気な声で言った。

「……どうも、ヨーカさん」

「みっちゃんの携帯から勝手に調べて電話かけたんだー。よかったらこの番号登録してね」

「は、はあ……」

「それで改めて、たまちゃんに頼みたい事があるん

だ。実はね……」

この人と出会った事によって、果たしてこれから先、いい事があるのだろうか？ ……と、作りかけのゴーヤーチャンプルーを見ながら私は思った。

「インヨウ・カオス」 終